

ZOCALO 2015 8 ▶ 9

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

すこいぞ、これは！ 2015.9.19 [土] ~ 11.3 [火・祝]

9月19日に開幕する企画展「すこいぞ、これは！」。何やらすこそなタイトルですが、どんな内容の展覧会なのか、担当の前山裕司学芸員に話を聞きました。

—変わったタイトルですけど、よっぽど自信がないとつけられないですね。

この展覧会は、昨年度文化庁の委託事業として、障害者の表現活動などを見て回った人たちが、今この人が面白いと推薦したアーティストを紹介するものです。そのため、ひとつのテーマに絞るのが難しいし、それで先入観を与えるよりも、まず作品の面白さを見てほしい、という気持ちから最終的にそうになりました。それぞれの推薦者の気持ちはさまざまですが、みな自信を持って推薦していると思いますよ。



阿部恵子 撮影：西川幸治



本田雅啓《男性一世》2014年 写真提供：アドリエブラヴオ 博多阪急

—障害者アートというと、ほかにもアール・ブリュットやアウトサイダー・アートとか、色々な呼び名があるように思いますが、どのような違いがあるのですか？

それぞれ視点や立場、歴史の違いがあります。用語を問題にすると差異とか境界線に意識が向かいすぎる弊害があるような気が

がします。この展覧会では特定の呼び名をつけていません。最近では、障害の有無さえ問題にしない、という公募展も見られます。また、文化庁の戦略的芸術文化創造推進事業の大きな目的も、優れた芸術文化の振興という点にあります。

気になっているのは、アウトサイダー・アートは、正規の美術教育を受けていない独学ということになりますが、アウトサイダーに対しては「インサイダー」が意識されます。ところが、いまや美大を出ていないアーティストも珍しくありません。かつては堅固だったアカデミズム、つまり「インサイダー」の城壁は崩落しているのではないのでしょうか。

—この展覧会の特徴は何でしょうか？

全国調査に基づいていますので、これまでほとんど紹介されたことのない人や、最近増えてきた障害者の展示でもあまり見かけない傾向の作品などが見られる、ということでしょうね。なかには、「作品」と呼べるのかどうかかわらな



伊藤輝政《三番星・桶川玉三郎丸》2009年



西脇直毅《成長のかたち》2012年 写真提供：大阪府 個人蔵

いようなものも含まれてくるはずですよ。

—どういところが「すこい」のでしょうか？

文化庁に申請するとき、事業名に「心揺さぶるアート事業」とつけましたが、否応なく心を揺さぶられる、あるいはつかまれるような感覚とでもいうのでしょうか。多分、かれらはなにかを作らざるをえない、それが創造行為の根源、ひいては芸術のおおもとにも触れてくるのではないのでしょうか。それが、心を揺さぶるのだと思います。(聞き手 N.O.)



田湯加那子《パワー・オブ・ソング》2003年

SMF 「あなたとどこでもアート／着がわりプロジェクト」はじまりました

この事業は、埼玉県内の5つの公立ミュージアム^{*1}の連携を基盤に、文化庁の助成を得て、さまざまなアートの分野で活動している方々が集う SMF (Saitama Muse Forum)^{*2} とともに、地域と共働してさまざまなアートプログラムやアウトリーチ活動を展開するものです。衣食住など暮らしに身近な視点からアートの創造性をとらえ直し、芸術活動の活性化・活動基盤整備を目指しています。

昨年の「小さな家プロジェクト」では、「旅する小さな家 アート空間デザインコンペ」を実施し、全国から200を超える応募がありました。最優秀作品は実際に制作され、別所沼公園ヒアシンズハウス前でお披露目され話題を呼びました。この「旅する家」は、今夏8月11日から23日まで近代美術館にやってきました。不思議な空間をぜひ体感してください。また、3月にはインターネット上に SMF アート長屋^{*3} が竣工し、入居受付がはじまりました。今後、井戸端 (自由な談話室) や物置 (とりあえずの保管庫兼パビリオン) を開設し、ネット上で「アートの宝船展」(仮称) の開催をもくろんでいます。

今年度は「着がわりプロジェクト」と題し、「衣」や「着る」をテーマとした多彩なアートプログラムを、連携する5つのミュージアムをはじめ県内各地で開催する予定です^{*4}。ひびのこづえさんの監修によるコスチューム制作ワークショップ「衣と体のせめぎあい」(7~11月) は今年のメインプログラムです。公募・書類審査によって、実制作可能なコスチューム作品を選び、監修者のアドバイスやパフォーマーの意向を取り入れながら制作。完成したコスチュームを着用したパフォーマーが、秋以降、近代美術館のほか県内各地でお披露目パフォーマンスを行う予定です。反物に移ろう季節のシルエットを露光・定着し積層する「時間のきもの」(4月~11月) を楽しむプロジェクト、廃工場を舞台として建築・美術・演劇・音楽、ワークショップとパフォーマンスが一体となった実験的な場づくりを試みる「(き) がわりを (き) がえる」(10月) など、今年も楽しいプログラムが目白押しです。どうぞお見逃しなく。(M.N.)

*1 人間博物館アリット、うらわ美術館、川口市立アートギャラリー・アトリア、川越市立美術館、埼玉県立近代美術館
*2 SMFの活動については、<http://artplatform.jp> 参照
*3 <http://artnagaya.jp> 家賃無料、登録すればどなたでも入居できます。
*4 上記*2のホームページに、今年度の事業予定を掲載しています。

報告 「もますまつり」& 「private, privateーわたしをひらくコレクション」関連イベント

今年4月のリニューアルオープンから早や4か月近くが経ちました。リニューアルオープンの熱気も少し落ち着き、美術館の日常が戻ってきています。4、5月に開催した記念イベント「もますまつり」には、計7,500人もの方にご来館いただき、再オープンを賑やかにお祝いすることができました。



建島館長のリニューアルオープン記念漫談

再オープン初日の建島館長の記念漫談(!)では、美術作品や美術館の楽しみ方などの質問について館長がユーモアたっぷりにお答えし、ご参加いただいた方にたくさんの笑顔をいただきました。



川嶋哲郎さんによるミュージアム・コンサート

また、リニューアルオープン記念展「private, privateーわたしをひらくコレクション」の担当学芸員3人によるリレートーク、美術家・佐藤時啓さんの作品「リキシャカメラ」の体験、川嶋哲郎さんのサクスのミュージアム・コンサートなど、本当に盛りだくさんの5日間でした。

美術館は、今年度から再び通年の開館となります。これまで以上に多くの方にとって、アートをより身近に楽しむことができる場となるよう、より「開かれた」美術館を目指していきたいと思えます。どうぞご期待ください！(N.O.)



リキシャカメラ体験

リニューアルオープンから1か月となる5月10日、企画展「private, privateーわたしをひらくコレクション」の関連イベントとして、トークセッション「MOMAT×MOT×MOMASーコレクション展示の可能性」を開催しました。近年意欲的な取り組みが目立つ「美術館におけるコレクション展示」について、3つの美術館の具体的な実践を参照しながら議論しようという企画です。前半は、埼玉県立近代美術館(MOMAS)の梅津によるMOMASコレクション及びprivate展インターセクションの事例紹介、東京国立近代美術館(MOMAT)の鈴木勝雄主任研究員による「<美術>を問い直すコレクション展示」、東京都現代美術館(MOT)の藤井亜紀学芸員による「MOTコレクションの概要と変遷」と、基調報告がなされました。



トークセッション「MOMAT×MOT×MOMASーコレクション展示の可能性」/左からMOMAT・鈴木氏、MOT・藤井氏、MOMAS・梅津

後半は、上述のメインパネラー3名に、private展の各セクションの担当学芸員3名が加わり、さらに、会場の聴衆からの質問を交えた討議。鈴木氏による美術館と博物館の境界という問題提起、藤井氏によるテーマ展示の成果と問題点・通史の見直しという指摘、梅津による審美的価値と展示的価値の違いなど、コレクションの展示に関わる多様な論点が浮き彫りになりました。コレクション展示をテーマとする議論の場はあまりないため、貴重な機会となりました。いずれ、当館ホームページなどでより詳しく報告したいと考えています。

また、private展の最終日の5月24日には、プロローグ、エピローグの映像を手がけた中川陽介氏をお招きしてビデオトークラウンジが開催されました。中川氏の映像を見ながら、作品とドキュメンタリーの境界、作ることの領域、アーティストの役割など、極めて今日的なアクチュアルな問題が話し合われました。会場の聴衆からも積極的な発言があり、映像をめぐる関心の高さが感じられました。(G.U.)



今年度のSMFホームページのTOP